

大学語学科目としての日本手話クラス： カリキュラム開発と授業運営

松岡 和美・數見 陽子・小林 信恵

はじめに

日本の大学における手話科目は、その大多数が福祉関連の科目として位置づけられてきた。しかし、日本手話がろう者が母語とする自然言語であることを明らかにする言語学的研究が進んだ結果、まだ少数ではあるが、日本手話を全専攻共通で他の言語科目と同じ枠で開講する大学が増えつつある（資料1参照）。それに伴い、大学の語学科目に適切なレベルのカリキュラム計画や、評価方法の情報に対するニーズが高まっている。本稿は、慶應義塾大学言語文化研究所が2015年度から開講している「日本手話初級」（「日本手話中級」は2017年度より開講）の実践報告を行い、大学の語学クラスとしての日本手話科目の運営の一例を提供することを目的とするものである。

1. 日本の手話指導の現状・日本手話科目設置の経緯と担当講師

一般的に、日本手話の習得を希望する学習者は、地域の手話奉仕員養成講座や、手話サークル等に参加するケースが多い。米川（2002）によれば、手話奉仕員養成講座は1970年に国の事業として始められ、手話サークルは1960年代後半からみられるようになったとされている。そのような場では、日本手話と手指日本語（日本手話の単語を日本語の文法にあてはめるもの。日本

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第49号（2018）pp.219~233

語対応手話ともいう)が明確に区別されることはなく、その結果として手指日本語(日本語対応手話)の学習歴を持つ受講生も多い。聴者が講師を務める手話クラスとは異なる教育観に基づき、1993年にろう者が目標言語を目標言語で教える直接教授法のひとつである「ナチュラル・アプローチ(NA法)」を用いた日本手話の指導の試みが、ろう者が中心となった団体D PROの手話教授法チームによって始められた。その活動が発展する形で、2009年に「NPO 法人手話教師センター」が発足し、ろう手話教師志望者の手話スキルを評価したうえで、適切な対象者にNA法の研修を行っている(手話教師センター公式サイト「手話教師センターの歴史」)。2017年現在、約200名の手話教師が会員として登録されている。現在、大学で日本手話クラスを担当する教師のほとんどは、この研修課程を修了している。

大学の語学科目としての日本手話クラスの多くは、手話を母語または第一言語とするろう講師が担当している。その理由として、ジェスチャー表現と手話表現の区別が安定して行えることや、NM表現(資料2参照)の十分な指導や評価が可能であることが挙げられるが、それに加えて、聴者が大多数の社会でマイノリティとして生活しているろう者の文化を体現し、学生に伝えることができる人材が手話講師を務める意義は極めて大きいと考えられている。資料1に含めた大学においても「日本手話を第一言語とするろう者であることの言語面・文化面での特性」が講師の採用にあたって重要視されたケースが多い。

慶應義塾大学三田キャンパスでは「日本手話初級Ⅰ／Ⅱ」が言語文化研究所の特殊講座の科目として、2015年度(平成27年度)に設置された。日本手話の母語話者(ネイティブサイナー)であり、聴者に対する手話指導の経験が豊富な人材である筆者(数見)が担当講師(非常勤)として採用された。開講にあたっては、米国の大学でのアメリカ手話クラスの聴講経験があり、手話言語学を専門とする研究者・語学教員である筆者(松岡)が、数見と前年度からカリキュラム(シラバス)の検討を行い、年度の暫定的なカリキュラム計画を作成した。開講初期の段階(2015～16年度)では、ろう講師を中心として日本手話カリキュラムを運営している関西学院大学人間福祉学部

て、初級および中級レベルの日本手話クラスの授業訪問とろう講師への聞き取り調査を実施した。また、2015年8月に三田キャンパスにて「大学手話教育に関する勉強会」を開催し、他大学で日本手話科目を担当するネイティブ講師との意見交換を行った。2017年度より「日本手話中級Ⅰ／Ⅱ」が設置され、筆者（小林）が非常勤講師として指導を担当している。同じ年度に松岡が担当する手話言語学の概論科目である「言語学特殊XⅤ／XⅥ」も開講され、手話科目と併せて履修している学生もいる。

2. カリキュラムと授業運営

2.1 授業の目的と達成目標

日本手話は独自の文法を持った言語であることを、ネイティブ講師の手話を通して学び取ることが慶應の日本手話科目の主たる目的である。日本手話は他の外国語と同様に一つの言語であり、日本語に手話単語を当てはめて表現するものではないことを（理屈だけではなく）肌で感じられる環境を提供する機会となっている。また言語学習だけではなく、日本手話を通じて異文化への理解を深め、ろう者の言語と文化を尊重する姿勢を身に付けることも、すべての専攻の学生を対象とする大学の言語科目として重要な側面である。上記の目的に基づいて設定された具体的な達成目標には、以下のようなものが含まれる（「NM 表現」「WH 疑問文」「CL 表現」は、資料2に簡単な解説を含めた）。

達成目標

- 自己紹介レベルの会話ができる。
- NM 表現を正しく用いて、WH 疑問文や YES/NO 疑問文で相手に簡単な質問ができる。
- WH 分裂文や NM 表現を使って自分のこと（経験や行動）を話せる。例えば、過去に怪我をした経験について話す際、いつ・どこ・なに・どのように・ケガの程度などを話せるようになる。

- 日本手話と日本語の語順が違うこと・日本手話には独自の文法があることを理解しており、音声と一緒に手指日本語（日本語対応手話）で話すようなことをしない。
- ろう文化の基本的知識を持っている。
- （中級クラス）基本的な CL 表現の読み取り、表出ができる。
- （中級クラス）教師のフィードバックなしで NM 表現のエラーに気づき、自己訂正ができるようになる。

カリキュラム計画は、年に1～2度の講師会議で改訂を行っている。以下は2017年度の「日本手話初級Ⅰ」のシラバスである。（「日本手話初級Ⅱ」「日本手話中級Ⅰ／Ⅱ」のシラバスは、資料3に含めた。）

2017年度「日本手話初級Ⅰ」シラバス

第1回 ＜講義＞「ろう文化と日本手話について」日本手話とろう文化を知る

第2回 ＜名前＞名前・色・数字（年齢）の表現 / 尋ねる表現

第3回 ＜学年・所属＞学年・所属・専攻の表現 / 尋ねる表現

第4回 ＜家族＞家族・人数の表現 / 尋ねる表現

第5回 ＜職業・曜日＞業種・曜日の表現 / 尋ねる表現

第6回 ＜出身地・略歴＞出身地・地名・期間・起点と終点の表現 / 尋ねる表現

第7回 ＜春期小テスト＞筆記（手話の読み取り）と表現（手話で表現）

第8回 ＜干支＞干支・動物・ペットの表現 / 尋ねる表現

第9回 ＜タイムテーブル＞時刻・一日の行動の表現 / 尋ねる表現

第10回 ＜通学＞方法・距離の表現 / 尋ねる表現

第11回 ＜食習慣＞食事・回数・数量の表現 / 尋ねる表現

第12回 ＜嗜好品＞酒類・飲物・頻度・体質の表現 / 尋ねる表現

第13回 デフゲストとの交流（日本手話で対話）

第14回 筆記（手話の読み取り）と表現（手話で表現）

その他 まとめと確認

各クラスの定員は原則として15名としているが、毎年それを上回る数の履修希望者があるため、初回授業に受講動機を簡潔に記したレポートによる選考を行っている（2015年度のみその場での抽選）。授業は原則としてろう講師が日本手話のみを用いて単独で行うが、初回授業のみ通訳者が入り、履修者に対して「手話言語の特徴」「ろう文化」「クラスでのルール」を説明する。履修者の所属学部は文学部・経済学部・商学部・法学部・薬学部・環境情報学部・看護医療学部と多岐にわたっており、特定の学部への目立った偏りはみられない。

2.2 試験・評価

学生の評価は、他大学のろう講師にとっても課題である。たとえば先に言及した「大学手話教育に関する勉強会」においても「文献を読ませてレポートを書かせる課題があるが、聴者の教育助手（ティーチング・アシスタント）と評価がずれてしまう」「試験の作り方がわからない」などのコメントがあった。

慶應では学期ごとに中間・期末の2回の試験を行っている。試験を学期に2回行うことで、学生は試験の形式に慣れることができ、教員も普段の授業の効果を確認することができる。松岡が聴講したアメリカでの手話クラスの試験の例を参考にして、下記のような構成の試験を実施している。

I. 単語や数字の理解

例：父、会社員、4人、2人、5時、7時間

II. 短文・短いストーリーの理解（キーワードを書いたり、表を記入する形式）

例：お酒の種類、頻度と量と状態

III. ろう文化（短い日本語で答える）

例：ろう者を呼ぶときの注意、デフリンピックのスポーツ競技のスタートの合図方法

IV. 表出テスト

例：指定された話題で平叙文・Yes/No 疑問文・WH 疑問文・WH 分

裂文を表出する

I から II が読み取りのタスクである。講師が表す手話単語や文を見て、その大意を日本語で書いたり、図表を埋めたりする形式である。まず短い手話単語の読み取りを行い、その後に短文、そしてまとまった文章と、読み取る手話の量が増えていく構成となっている。中級クラスでは、CL 表現を読み取って部屋の見取り図を作成するタスクなどが追加されている。表出テストでは、学生全員を一旦廊下で待機させ、講師が順に 1 名または 2 名を教室に呼び戻し、数分程度で対話や手話の表出をさせる。表出する内容は、簡単な日本語の書面で学生に提示される。学生は、試験の内容を外で待っている学生に伝えないように指示されており、試験が終わったら速やかに退出する。

表出テストの評価基準には「手話表現の正確さ」「NM 表現の正確さ」「流暢さ（自然なリズム含む）」などが用いられる。中間試験および春学期の期末試験は採点の後、学生に返却され、必要に応じて個別にコメントを出している。

2.3 自宅学習（課題）

自宅で行う課題は、手話動画を用いた授業内容の復習が主体である。この動画は、春や夏の授業がない期間に撮影しており、学生にはネット上で動画にアクセスするための情報が配布される。動画の内容は、各回で用いる主要な単語や表現、ろう者同士の対話例などである。短い手話スピーチ課題が課されることもある。他には「NHK 手話ニュース通信」の視聴も課題として出されている。

手話には文字がないため、音声言語の授業で多用される「作文」課題を出すことはできない。しかしその代替案として、昨今は多くの学生が使っているスマートフォンの動画撮影機能を用いることで、簡単な文章を日本手話で表出した動画ファイルを提出させることが可能になっている。慶應では、試験を病欠した学生への対応策として動画ファイルの提出を求めたケースがある。

2.4 授業内外の活動

2017年度より「日本手話中級」が設置されたことから、授業時間の一部を用いた合同授業の試みを開始した。指導が必要と判断された「ろう文化での適切なあいさつの方法」や「ろう教員が言っていることがわからない場合の対処法」について、両方のクラスの学生を集め、二人の講師がチームティーチングを行った。手話の読み取りに慣れている中級クラスの学生がまず実演を担当することで、中級クラスの学生は自分の学習進度を確認できると同時に、初級クラスの学生は手話学習継続のモチベーションを高めることができる。このような理由から、合同授業は学生から強い支持を受ける教室活動となっている。

学生が自発的に行っている活動として、ろう者が経営している飲食店での年に1～2回の食事会がある。学生がろう講師と集まり、手話のみで対話する。従業員や他のろう者の客と積極的に手話で会話する者もいる。それに加えて、日本手話を第一言語とするろう者と、慶應の日本手話クラスの学生が集まって英語を勉強する JSL-English Study Group (JESG) の活動も、2017年度から始まっている。この活動では、洋書の初級英語教材 *Basic Grammar in Use* (Cambridge University Press) を用いて、手話と筆談でコミュニケーションをとっている。春学期の初級クラスを終わったばかりの学生でも積極的に会話ができおり、ろう参加者からも好評である。

3. 学生への教育効果

手指日本語（日本語対応手話）とは、日本語に手話単語を当てはめて表すコミュニケーション手段であるため、一度手指日本語をおぼえてしまうと、その知識がスムーズな日本手話の習得を妨げることが少なくない（野口2017）。それに対して、慶應の日本手話クラス履修学生の場合は「手話＝日本語とは異なる独自の言語」の意識が高く、日本語にとらわれず日本手話を日本手話として自然に受け入れる姿が顕著に見られる。それには、若者の持つ柔軟性、大学で様々な授業を履修することで素直に新しい知識を吸収する

態度、語学を学ぶ意識の高さなどの要因が関わっているように思われる。どの学生も、授業が進むにつれて日本手話が日本語とは異なる構造を持つことや、手話にも文法があることなどを確実に見出している。日本手話について全く知らないまっさらな状態から学習を始める方が、よりスムーズな手話習得をもたらすことがうかがえる。

慶應の手話クラスは日本手話を母語とするろう者（ネイティブサイナー）が担当しているが、その意義は日本手話やろう文化をまったく知らない学生とろう社会とを繋ぐことにある。卒業後にろう者の所属する企業に就職したり、ろう学生の家庭教師をするなど、慶應での手話習得をきっかけに、ろうコミュニティに触れる機会を持つ履修者も見受けられる。アルバイト先でろう者に接した際に臨機応変に日本手話で対応でき、相手に喜ばれたという学生の報告もある。こういった事例が増えていくことは、社会の多様性・多文化主義の促進の観点から大変望ましいものである。毎年一人でも多くの学生に「手話は言語であり、ろう文化が存在する」と知ってもらうことで、家族・友人などがそれらの学生に影響を受け、日本手話とろう者に関して正しい知識を持つ人が少しずつでも増えていくことを期待したい。また、大学の言語科目に日本手話が含まれていることは、ややもすると趣味の延長ととられがちな手話言語が、他の言語と同等であるという正しい認識を社会に広めることにもつながると思われる。

さらに、手話科目の履修は、学生の言語スキル・社会性スキルの習得にも大きく寄与している。慶應で日本手話科目を履修している学生に対して、「手話＝日本語とは異なる言語という意識が高い」「ろう者を尊重する態度を持っている」「話を聞くときの反応が明確」「手話がわからないときの臨機応変の力が高い」というコメントがろう者から寄せられている。このような異文化対応スキルは、手話学習にとどまらず、社会における様々な場面で有用なものとなろう。

4. 今後の課題と展望

この節では、日本手話クラス運営にあたっての今後の課題をいくつか取り上げる。日本手話の文法は、顎引きや首振り、目の見開きなどの手以外の動きで表される。文法的に正しい手話を表出するには「手」と「手以外の身体部分」を同時に動かすNM表現が必要である（木村・市田 1995、木村 2011、松岡 2015）。たとえば WH 疑問文の表出では、疑問詞（「何」など）を手指で表しながら、眉上げと目の見開き（または眉寄せと目の細め）・左右の細かい首ふりが必要である（図1）。



wh 疑問の NM 表現

〈何?〉

図1 WH疑問文のNM表現（木村2011:57-58）

このような手指と非手指の動きを文法的に組み合わせる表現は、初級学習者にとって習得が難しい。現行クラスでは、ホワイトボードに書いた記号を使った解説や、教員によるモデル提示や練習問題などを毎週繰り返すことで、数ヶ月後に基本的な表出が習得できてはいるが、ごちなくなってしまうがちな同時表出をスムーズに習得できる教授法の開発が課題の一つとして挙げられる。

また、視覚言語である日本手話では、まず手招きで相手の注意をひいてから話し始める必要があるが、聴の学生が自らそのような文化の違いに気づくことは難しく、丁寧な解説が必要である。教員の使う手話表現や授業内での

指示がわからないときも、日本の聴者の文化を持つ学生たちは、教員に「自分がわかっていない」ことを明示的に伝える発想が乏しい。ろう者と聴者の文化が違うということを初回授業で聞いてはいても、とっさに文化の違いに基づいた判断をすることが難しいからである。ろう講師としては、このような点について、音声言語を使用せず目標言語だけで説明する方策を今後も検討する必要がある。学生のさらなる日本手話習得のため、現在の初級および中級クラスを継続し、さらにその先の（3年目の）上級クラスがあれば、大学卒業時にはろう者とスムーズな日常会話ができるレベルの日本手話習得が可能であると思われる。

最後に、大学レベルの手話クラス運営の大きな問題は、適切な教材の不足である。福祉系の科目も含めれば、国内で手話指導を行っているろう講師は少なくない。様々な大学で使用可能な教科書・ワークブック・動画教材・教授法の共有などの開発は喫緊の課題であり、慶應での授業実践をそのような教材開発に結び付けていきたい。

おわりに

本稿では、2015年度から設置された慶應三田キャンパス「日本手話」クラスの現状をまとめ、今後の課題を検討した。直接教授法による手話指導の訓練を受けた経験豊富なネイティブ講師の指導と教材開発・聴教員との連携・語学としての日本手話への学生の強い関心が、高い学習効果を支える要因となっている。今後も教員の連携にもとづく授業運営を進めていきたい。

謝辞

木村晴美氏（国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科）と前川和美氏（関西学院大学日本手話講師）には、日本の手話教授法の小史について情報提供を受けた。ここに謝意を表したい。慶應義塾大学における日本手話科目の設置準備およびカリキュラムや教材の開発にあたっては、慶應義塾大学学事振興資金（個人研究）平成27年度～28年度「大学における日本

手話科目の教材開発」および平成29年度「視覚言語の特性を考慮した語学教材開発の試み」（研究代表者・松岡和美）の助成を受けた。

参考文献

木村晴美・市田泰弘（1995）『はじめての手話―初歩からやさしく学べる手話の本』
東京：生活書院。

木村春美（2011）『日本手話と日本語対応手話（手指日本語）：間にある「深い谷」』
東京：生活書院。

手話教師センター「手話教師センターの歴史」NPO 法人手話教師センター公式サイト
<https://www.jsltc.org/> 組織 /

野口岳史（2017）「学習経験者を対象とした効果的な手話教授法とは」第17回日本手話教育研究大会口頭発表。国立民族学博物館。

松岡和美（2015）『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』東京：くろしお出版。

米川明彦（2002）『手話ということば―もう一つの日本の言語』東京：PHP 研究所。

資料1：日本手話を全専攻共通で、言語科目として開講している大学

日本手話を「全学部・全専攻対象」の「語学科目（外国語と同じ枠）」として開講している大学（五十音順。*の大学は手話言語学科目も別に開講）

慶應義塾大学*

四国学院大学

東京外国語大学*

東京経済大学

東京大学*

日本社会事業大学

立教大学

資料2：手話言語学の用語解説（詳細は松岡 2015参照）

(a) NM 表現：NM は Non-manual（非手指）の略。手指以外の身体部分を用いて表現する、文法的な性質を持つ表現の総称である。NMM(non-manual markers), NMS(non-manual signal) という呼称もある。眉上げ・眉寄せ・目の細め・口型・うなずきなど、様々な種類の NM 表現が存在する。

(b) WH 分裂文：下記の例のように、WH 疑問詞が文中に現れる構文。疑問文ではなく、強調などの意味もない。ろう者同士の対話で頻出する。下の例で「__ wh」は、WH の NM 表現が現れる範囲を示している。

__wh

(i) / 私 店 本 買う いつ 昨日 / （松岡 2015:68）

(c) CL 表現：表したい人や物の特徴を捉えた図像的な表現。ジェスチャーとは異なり、ネイティブサイナー間で共有された形式が確立しており、口型などの NM 表現も CL の一部を構成する。

資料3：2017年度日本手話クラス（シラバス）

春学期「日本手話初級Ⅰ」

- 第1回 <講義>「ろう文化と日本手話について」 日本手話とろう文化を知る
- 第2回 <名前>名前・色・数字（年齢）の表現 / 尋ねる表現
- 第3回 <学年・所属>学年・所属・専攻の表現 / 尋ねる表現
- 第4回 <家族>家族・人数の表現 / 尋ねる表現
- 第5回 <職業・曜日>業種・曜日の表現 / 尋ねる表現
- 第6回 <出身地・略歴>出身地・地名・期間・起点と終点の表現 / 尋ねる表現
- 第7回 <春期小テスト>筆記（手話の読み取り）と表現（手話で表現）
- 第8回 <干支>干支・動物・ペットの表現 / 尋ねる表現
- 第9回 <タイムテーブル>時刻・一日の行動の表現 / 尋ねる表現
- 第10回 <通学>方法・距離の表現 / 尋ねる表現
- 第11回 <食習慣>食事・回数・数量の表現 / 尋ねる表現
- 第12回 <嗜好品>酒類・飲物・頻度・体質の表現 / 尋ねる表現
- 第13回 デフゲストとの交流（日本手話で対話）
- 第14回 筆記（手話の読み取り）と表現（手話で表現）
- その他 まとめと確認

秋学期「日本手話初級Ⅱ」

- 第1回 <春期の復習・夏休み>春期の復習・夏休みの出来事の表現
- 第2回 <スポーツ>種類・機能・経験の有無の表現 / 尋ねる表現
- 第3回 <旅行>国内 / 海外・目的・期間・交通手段・費用の表現 / 尋ねる表現
- 第4回 <行事・授業>行事（三田祭など）の表現、科目の表現 / 尋ねる表現
- 第5回 <趣味>程度の表現 / 尋ねる表現
- 第6回 <病気・怪我>部位・怪我の程度の表現 / 尋ねる表現

- 第7回 <秋期小テスト>筆記（手話の読み取り）と表現（手話で表現）
- 第8回 <自転車・自動車>駐輪場・免許取得の希望の表現 / 尋ねる表現
- 第9回 <家> CL 空間・間取り図の表現 / 尋ねる表現
- 第10回 <財布の中身>カードの種類・お金の表現 / 尋ねる表現
- 第11回 <約束・待ち合わせ>誘う・断る・招待・訪問の表現 / 尋ねる表現
- 第12回 <プレゼンテーション>日本手話で3分間プレゼンテーション
- 第13回 <デフゲスト>ろう者との交流（日本手話で談話）
- 第14回 筆記（手話の読み取り）と表現（手話で表現）
- その他 まとめと確認

春学期「日本手話中級Ⅰ」

- 第1回 復習
- 第2回 時間・習慣（1）
- 第3回 時間・習慣（2）
- 第4回 時間・習慣（3）
- 第5回 学生プレゼンテーション
- 第6回 過去・現在・未来（1）
- 第7回 前半の確認（筆記）
- 第8回 過去・現在・未来（2）
- 第9回 程度・頻度
- 第10回 学生プレゼンテーション
- 第11回 CL（平面）
- 第12回 CL（ものの描写）
- 第13回 CL（人の描写）
- 第14回 筆記（手話の読み取り）と表現（手話で表現）
- その他 まとめと確認

秋学期「日本手話中級Ⅱ」

第1回 復習

第2回 NMM (1)

第3回 NMM (2)

第4回 NMM (3)、学生プレゼンテーション

第5回 RS (1)

第6回 RS (2)

第7回 前半の確認

第8回 手話文学 (ポエム・語り) (1)

第9回 手話文学 (ポエム・語り) (2)

第10回 手話文学 (ポエム・語り) (3)

第11回 謝罪・依頼・敬意表現 (1)

第12回 謝罪・依頼・敬意表現 (2)

第13回 謝罪・依頼・敬意表現 (3)、学生プレゼンテーション

第14回 筆記 (手話の読み取り) と表現 (手話で表現)

その他 まとめと確認